

■ (82) 漱石の生きた時代も知る、100年ぶりの「こころ」 2014. 7. 25

大正3(1914)年の4月20日、「東京朝日新聞」に「こころ」の連載が開始されましたが、ちょうど100年後の同月同日からその再掲載が始まり、大変な人気です。この「新聞なるほど講座」でも取り上げようかと迷っているうちに今となってしまいました。14年3月22日付朝刊の「4月 新企画続々 紙面パワーアップ」では、次のように書かれています(抜粋)。

〈「こころ」は岩波文庫など多くの文庫で読めますが、新聞連載当時は違う点もあります。新聞初出の題は「心」。いまでは「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」の3部構成で知られていますが、連載当時は「先生の遺書」の1部構成です。漱石は連載開始前日のお知らせで、「今度は短篇(たんぺん)をいくつか書いてみたい」と予告。ところが結果的に長編になり、連載終了後の9月に岩波書店から刊行される段階で3部構成になりました。今回は新聞連載当時の構成で掲載します。〉

小説の内容は後期三部作とされる「彼岸過迄」「行人」と同様に、人間の深いところにあるエゴイズムと人間としての倫理観との葛藤が表現されています。

なぜいま「こころ」なのか。

単に現代仮名遣いに改め、読みやすくしただけではなく、その当時日常で普通に使っていたことば一白緋、兵児帯などの説明があり、理解しやすくしています。また、『こころ』の風景「漱石こんな人」「回顧一九一四年」という三つの短いコラムが随時載せられていてより深く読むことができます。『こころ』の風景では、明治時代末期の生活・風俗や文化など時代背景を解説していて、4月23日は「鎌倉と海水浴」、4月30日は「麦酒(ビール)」、でした。漱石の生きた時代を知ることができます。

小説とは別に、これらのコラムはノートにまとめておきたい。社会科などでも利用価値があります。「こころ」の方はA3判に拡大コピーして、毎日1回分を掲示しておくとういでしょう。

(全国新聞教育研究協議会顧問・鈴木伸男)